

第七回「宮古島文学賞」選考評

大城 貞俊

希望を作る文学の力

第一席の受賞作品「水平線」（伊佐山昂）は希望を作る文学の力を示した作品だ。癌再発の不安を抱えた「私」（≡野辺路子）は病ゆえに職場で居場所を失い、死んだ祖母が住んでいた伊良部島に渡り一人暮らしを始める。スナックを営むナオミ、アユム親子や祖父母の戦争体験などを知り、また島の素朴な青年との交流を通して生きる希望を取り戻す。過去の親族の戦争体験や現在のナオミ親子のDV被害を挿入しながら、生と死の大きなテーマが身近な日常のテーマになる。作品は閉じることなく水平線を見つめながら自らの幸せの鼓動やアユム親子の希望へ開いていく。謎解きのように展開する作品の構成は緊張感をも呼び込み、普遍的なテーマにまで見事に押し上げた作品に希望を作る文学の力を感じた。

第二席の「爆ぜる。」（佐藤陽翔）は交通事故で父を亡くした被害者の側の若者「俺」と、加害者の側の若者の顛末を描いた作品だ。被害者の側の「俺」は社会を卑下し、人間は孤島と認識するも、その孤島に橋を架けようとする彼女の存在に気づき、また困難な状況の中でも笑いを忘れなかった母親を思い出して生きて行く決意をする。作品には随所に優れた認識や表現が散逸している。言葉の力、作品の持つ喚起力を強く感じた。

佳作の「夏の消印」（半崎輝）は、小一だった「私」が両親の離婚で母と共に島を離れる。二十年後、結婚を前に父の消息を訪ねて島を訪れるが、偶然出会った男が父であった。父は「私」のことを気づかずに、私も名乗らずに別れるが、父子の深い情愛が静かに描かれる。作品冒頭の風景描写も抜群で、「私」の心情が

微細に語られる。タイトルにも工夫があり、夏ごとに届く葉書を「夏の消印」としたセンスには作家としての可能性をも感じた。

受賞には至らなかったが他の最終候補作も興味深かった。「廃島」は単純なストーリーだが力強く明快なメッセージがあり好感が持てた。「島でおよぐ」はコンピュータという時代性（現代性）を取り込んだ作品で挑戦的な試みに新鮮さを感じた。「北緯三十九度より南」は昭一少年の心情がよく描けている。「島の少年」は成長していく少年たちの姿を澁刺と爽やかに描き、魅力的であった。「白い島」は白いカーテンに囲まれた病室を「島」と喻え、「島」で生きることの工夫を展開した着想にユニークさを感じた。

手元に届いた最終候補作は、すべてが自らが発見した言葉、自らが発見した島を果敢に描いている。この意欲が感動を生む作品を作り上げていくのだろう。応募者諸兄に敬意を表したい。